

明治学院における日本の朝鮮統治期留学生の活動に関する再評価プロジェクト

プロジェクトメンバー：嶋田彩司

2014年度のプロジェクト計画は、2013年度プロジェクト「日本の朝鮮統治期における明治学院留学生に関する共同研究」の成果を継承し、さらに発展させることを目標に計画申請し、承認を得た。その事業計画は下記の通りである。

2013年度のプロジェクトは、いわゆる植民地時代を中心とする明治学院ゆかりの朝鮮半島出身者の事跡をあらためて確認し、その歴史的意味を現代の視点から再検証することにあった。数度に及ぶ研究会等を通して得られたその成果は、11月9日に開催される李光洙に関わる国際シンポジウム等によって学内外に示されることとなる。

しかし、当該時期の明治学院同窓留学生は李光洙のみではない。おなじく文学関係でも、金東仁（1900～1951）、朱耀翰（1900～1979）が知られており、また研究者、政治家として活躍しつつ後進の教育に大きな業績を残した白南薫（1885～1967）や文一平（1888～1939）等々、明治学院ゆかりの人物は多数存在し、残念なことながらその足跡はいずれも学内の一部の関心を集めるにとどまっている。

2014年度のプロジェクト研究においては、これら明治学院に学んだ朝鮮半島出身留学生について、その資料発掘と再評価の作業を進展させることを目的とする。

仄聞するところによれば、学院としてこれらの留学生たちを顕彰する事業が検討されており、承認を得られれば2014年度中にもそれが実現するという。もとより安易かつ単純な顕彰作業がおこなわれるものとは考えないが、じゅうぶんな吟味と意見交換を通して、当該者に対する多面的な評価がおこなわれることが望ましい。本プロジェクトは結果として、上記事業計画案を次の150年の評価にも耐え得るものとすべく、関係者の冷静な調査研究と議論の場となることをめざしている。

残念ながら、本年度のプロジェクトは上記の計画に照らして順調に進展、推移したとはいえない。ただ、残された時間（本稿執筆は1月上旬）を利用し、年度内もしくは次年度にかけて、上記の目的の達成に向けて活動を進めていきたいと考えている。

具体的には、明治学院に学んだ朝鮮半島出身留学生についてのシンポジウムの開催が考えられる。上記のように、2013年度の研究プロジェクトを基盤として、2013年11月に李光洙に関するシンポジウムを開催した。次回に開催するシンポジウムは、それを発展的に継続したものになる。

その企画に関する指針をふたつ挙げておく。

1、朝鮮半島出身留学生のうち、のちに作家、詩人として朝鮮半島における近代文学に影響を与えた者は、李光洙にとどまらない。下記の二名をはじめとして、それらの者の軌跡を総合的にとらえ、文学的トポスとしての明治学院に着目する。

朱耀翰（1900～1979）は詩人として知られる。「火祭り」は近代的な自由詩として教科書等にも載せられており、その浪漫主義的な詩風は1913年からの明治学院中等部在学中に育まれたものといつてよい。『白金学報』の学生委員をとつめながら、そこに彼はいくつかの作品を発表している。「火

祭り」は卒業後、東京第一高等学校時代に雑誌『創造』初号に発表されたものであるが、その文学的土壌はすでに学院在学中に熟成のときをむかえつつあったといつてよい。

上記『創造』創刊号に短篇小説「弱き者の悲しみ」を発表したのが、金東仁（1900～1951）である。自然主義的傾向のつよい作品を書いた小説家として知られ、韓国文学界の権威ある賞のひとつに彼の名が冠せられている（「東仁文学賞」）ことからわかるように、現在なおその評価は高い。彼の明治学院中学部入学は1915年、朱耀翰に文学的な影響を受けたとされている。

明治学院が明治期文学の一極を形成した『文学界』の拠点のひとつであったことはよく知られている。直接的な影響関係を計測することはむずかしいとしても、学院に横溢する文学的な雰囲気、朝鮮半島出身留学生を感化したことは注目されてよい。

2、上記の三名は、朝鮮半島における近代文学の開拓者であると同時に、植民地被支配下にある朝鮮半島の独立を目指す若き運動家でもあった。そして、これには、白南薫、文一平、金鴻亮といった、のちに教育や歴史研究等の分野で名をなすこととなる者たちも参画している。

文一平（1888～1939）は歴史学者。1905年に明治学院普通部に入学した。歴史研究家として知られる一方で、記者を経て朝鮮日報編集顧問に就任するなど、ひろく言論界で活躍した。

白南薫（1885～1967）は、教育事業に携わるとともに、政治上の要職も歴任した人物である。

金鴻亮（1885～1950）は1906年明治学院普通部入学。民族運動家で、安岳事件に関与したとして服役したこともある。

これらの人物は、二・八独立宣言から三・一独立運動へとつづく植民地被支配打破の運動においてきわめて重要な働きをしている。佐藤飛文はこのことをもって「朝鮮独立運動の拠点（または独立心の醸成所）としての明治学院」と評しているが、まさに日本における独立運動においては明治学院が一つの起点になっているといえるであろう。とともにこれらの人物は、解放後の朝鮮半島における言論活動の歴史でも重要な位置を占めている。東亜日報、朝鮮日報（ともに1920～）は今日なお韓国の主要な新聞紙であるが、これらの創刊時に関わりをもった人物は多い。文学のみならず政治もまた「ことば」による伝達の営為であるといつてよい。明治学院が、朝鮮半島出身留学生に与え得たものとは、畢竟「ことば」であったのかもしれない。